

# 学者は世間に顔を向けよ

—天野文雄氏の近著に触れて

堂 本 正 樹

大阪大学教授の天野文雄氏は、早くから能楽関係の研究者中の逸材として知られ、筆者も昭和五十年後半の、氏の大学院生期に業界紙に発表される小考の類から注目し、切り抜いて保存して来た。その氏は平成七年和泉書院刊の『翁猿楽研究』で、観世寿夫賞を受賞されている。

長年の業績からは受賞は当然だが、この書物一つに限れば、学者のこの種「学界向け学術書」の常で、訂正補筆はあるものの、諸機関に発表した既成の論文を集成とて、通読しても一つのイメージが凝縮し、対象が立体化されない。著書とは本来、自己の中でこれら総てを溶解・液状化してから、改めて「他者」へ向けて書き下ろしにすべきものだが、

学者と言っても退職金を貰う大学職員的身となれば、日常業務は繁忙でその時間もあるまゝいから、他の人の場合も含めて「業績」の煉瓦積みとせざるを得ないのだ。身の回りにいる「学界人」の顔ばかりが大きく見え、「他者」は霞む。……分かる。

こうした研究成果が、人間の豊かさとして稔らないと、個々・末端の正確さだけに拘り、それが全体の魅力や推進力を弱らせていても、気がつかない事となる。勿論「学者はそれで良い」と突き放すのも、一つの態度ではあるが、氏が第十七回大阪城新能のパンフに書かれた「翁」の名称と成立過程についての「覚書」などは、「難しい事を難しく」書いて、何が何だか分からなかった。とても初めて能

を見るだろう人を想定した文章では無い。「総て正しく」は、全体の為に悪である。捨てるものを知り、全体を生かすのが社会人というものである。

ところがこの十月、氏は「講談社選書メチエ」の一冊として、『能に憑かれた権力者 秀吉能楽愛好記』を公にされる。豊臣秀吉晩年の能への耽溺が、能の運命を替えた次第を詳細に述べた著で、学問的正確さと、読み物の楽しさを両立させる佳作となっているのだから目出度い。

「あとがき」を見ると、「一般読者向けの本といえは、いわゆる入門書的なものが圧倒的に多いのだが、そこに近年の能楽研究の成果が盛りこまれることはきわめて稀である。ま

た、そうした入門書的な本は、進展著しい音楽研究の現状にうといがゆえに、旧来の伝統的な音楽観に依拠している場合が多く、その分、現代の日本人の能に対する理解は、ますます表面的で、部分的で、保守的な方向に向かっていくように思われる」とある。この溝を埋めようとするのが本書だとの意欲。

成る程それは応分に成就されている。しかしそれは、編集者横山建城氏の執拗な注文に耳傾け、その建言に応じたかららしい。その意義を天野氏は認め、感謝している。

従来 of 学術書には、著者の買い切り自費出版の故に、一般人に「売る」という視点が欠如していた。こうしたプロの出版社が、印税を払っての事業となれば、世阿弥の言う「ひとの目に見ゆるる公案」が求められ、「離見」の対象となる。ここに初めて学者も仕事も「他者」の前に出されるのだ。

それにしても、何故「進展著しい音楽研究」が、一般の目に見ゆるる公案「つまり大衆の感覚に受け入れられるべき工夫をしない、学界の無策の咎ではないのか。また入門書にもピンからキリまでで、確かにそうした安易なものもあるが、著者などは常に世間に向けた仕

事を心掛け、そこに学界の現状を反映させようと努力して来た。NHKで教育TVをさせて貰った時には、テキストの冒頭に「戦前と戦後の研究成果十二ヶ条」を掲げた。最近させて貰った「日本の伝統芸能親賞入門」の能・狂言でも、『恋重荷』で「妙左本」の型を併映しその意義を解説するなど、努力しているのだ。こうした行いそのものを、学者は知らず、知ろうともしない。ある人がこれを、「一種の北朝鮮現象」と比喩したが、自ら垣根を設けて、敢えて外を見まいとする精神風土が、学者にはある。世にある者への小人物の嫉妬。

だからこそ一般はもとより、学者でも一度他部門の人となれば、今日の先端は伝わらない。歴史学・社会学・民俗学の学者の能の扱いは旧態依然、野上豊一郎止まりである。これをさせている学界には、責任がないのか。暗い悪文で非違意の文章の論文。レジュメを小声で読むだけの発表。大学の梯子を登る履歴書の「業績欄」の為にだけ、学界付き合いをしている先生は多い。ボスの顔色を見、派閥の潮流を読み、嫉妬を買わないようにだけ生きる学者？

そういう人の「学問」は、部分は正確でも全体は難解で、外への伝達力

を持たない。

天野氏のこの「能に憑かれた権力者」はそうでないから、安心して引用するのだが、前記「あとがき」に、編集者の指摘と希望に添った結果、「論の深さ」と「わかりやすさ」が決して対立するものでないことを知ることが出来たのは、私にはまことに新鮮で貴重な体験だった」は、嬉しい告白である。今後「学者」の方々が、この天野氏と同じ体験を積み、成長される事を望みたい。

しかし天野氏の本にも、学界の「尾っぽ」がこびりついているのも指摘出来る。能の演目を一々、「《高砂》」式に二重山括弧でくくるとやり方だ。これは法政大学の表章教授が初めてワープロに歓喜耽溺されていた時、フト採用された形だが、何故か学者間の踏み絵となつて使用されるようになる。これを使えば学者、使わなければ非学者の譜牒。……歌舞伎で《忠臣蔵》、新劇で《夜明け前》と書くだろうか。そうでなくとも専門語の多い能にさらなる専門語を作りたいとの欲望は、学者の閉じ籠もり願望、不健康な専門家意識に過ぎない。

そうしたものを超越して、世間と向き合うのが、「学者」の第一歩ではないか。